

## N I C Uで長期管理を要した症例

増 本 義

(国立長崎中央病院小児科)

### はじめに

最近、産科や新生児科の技術進歩によって超未熟児が高率に生存し、その大部分は障害なく退院することが出来るようになってきた。しかし、これらの患者は長期にN I C Uのベッドを占有するためにN I C Uのベッドが回転しなくて困った状況が生じている。そこで今回、長期入院患者の分析を試みた。

### 方 法

長崎県で病的新生児を管理している17病院にアンケートを送付し、昭和61年に入院した体重別入院数と3カ月以上N I C Uに入院した患児について調査した。

### 結 果

17病院中15病院により回答があり、その中で3カ月以上入院した症例の報告があったのは、当院を含めた5病院であった。入院数は1442人で死亡数は54人。その中で3カ月以上入院したものは40例で内5人は入院中に死亡した。(61年の長崎県の出生数は19943人で早期新生児死亡数は

表1. 国立長崎中央病院とその他の病院の体重別入院数と長期入院数

出生時体重	国立長崎中央病院	その他の病院
<1000g	10 (1) / 14 (5)	4 (1) / 14 (9)
1000g - 1499g	8 / 23	6 / 45 (4)
1500g - 1999g	3 / 35 (1)	1 / 122 (7)
2000g - 2499g	0 / 55	0 / 240 (4)
2500g -	6 (2) / 153	2 (1) / 741 (18)
計	27 (3) / 280 (12)	13 (1) / 1162 (42)

( )内は死亡数

41人であった。) 長期入院患者の体重別入院数は表1に示す通りであった。入院理由を表2に示

したが、1500g未熟児では未熟性によるものであり、1500g以上では心奇形、奇形によるものが多かった。

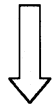
## 考 察

当院への入院数は280人で内27人が長期入院であり18例が1500g未熟児であった。(背景の出生数は5700人と離島の2500人)。一方、他の病院では総入院1162人の中で長期入院児は13例であった。これは当院には重症の極小・超未熟児が入院しているということであろう。

1000g未満の生存児はほぼ全例3カ月以上の入院を要している(12/14, 表2)が、前年度の報告の如く500g-999g出生児を0.36と推定しその60%が生存するとなると72人出生して43人が生存することになり、計算上30人の長期入院増となる。これらの児が4カ月平均入院するとして10床を占有する。今後超未熟児の掘り起こしに従いNICUの増床が急務と考えられる。

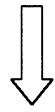
表2. 長期入院の理由

1) <1500g (28例)	: 未熟性による	→ 27例
	奇形による	→ 1例
2) 1500g - 2499g (4例)	: 心疾患による	→ 2例
	奇形による	→ 1例
	未熟性による	→ 1例
3) 2500g以上 (8例)	: 心疾患による	→ 3例
	奇形による	→ 3例
	仮死による	→ 2例



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 考察

当院への入院数は280人で内27人が長期入院であり18例が1500g未熟児であった。(背景の出生数は5700人と離島の2500人)。一方、他の病院では総入院1162人の中で長期入院児は13例であった。これは当院には重症の極小・超未熟児が入院しているということであろう。

1000g未満の生存児はほぼ全例3ヵ月以上の入院を要している(12/14,表2)が、前年度の報告の如く500g-999g出生児を0.36と推定しその60%が生存するとなると72人出生して43人が生存することになり、計算上30人の長期入院増となる。これらの児が4ヵ月平均入院するとして10床を占有する。今後超未熟児の掘り起こしに従いNICUの増床が急務と考えられる。